

仏心と葬儀 ―その9―

苦闘が育んだ夫婦愛

飛田が毎日トラックに乗って市内を飛び回り、仕事の注文を探して歩く一方で、陰に日向に飛田を支えながら家事と仕事の両面で内助の功を發揮する芳栄。まさに創業から五年間ほどは「食うや食わず」と呼べるほどの苦しい日々が続きましたが、それでもこの歳月は飛田に「やればできる」という信念を、より確かなものにしてくれると同時に、彼ら夫婦のきずなをしっかりと結びつけることにもなりました。それは、市内でもその名を知られる葬儀社となった現在でも、何かにつけて飛田が芳栄に相談するという事実にも表れています。

「何事も自分一人のできるものじゃない。妻をはじめ、多くの人の支えがあったからこそ、現在までこうしてやってこられたのです」と飛田は、社員の声にもよく耳を傾けます。それもこれも、芳栄と二人三脚で歩んできた苦闘の毎日から学んだ、飛田なりの人生哲学によるものといえるでしょう。

優れた人材にも恵まれて

「企業は人だ」とよく言われます。しかし、どんな企業にどのような人

材が必要であるかということは、簡単に決められるものではありません。それだけに、本当に企業の理念や実務にマッチした人材を得られた企業は、幸運であるといえるでしょう。

開業はしたものの、葬儀社の経営にはズブの素人であった飛田が、開業から十数年ほどで会社を軌道に乗せることができた陰には、人材に恵まれたという事実を忘れることはできません。

開業一年目から、飛田の人物に惚れ込んで苦楽をともにしてきた青年社員のことは前にも書きました。「友人から社長がお子さんを亡くされ、その供養のために葬儀社を始めたという話を聞き、その心情に心を打たれて入社を決意しました。さらに入社してからは、志を立てたからには最後まで何が何でもやり通すという飛田社長の頑張り精神に感心し、この人と一緒にやっていきたいと強く思いました」。そんな青年は、やがて飛田が右腕とも頼ることのできる立派な経営幹部へと成長していきました。まさに苦しい時であったからこそ頼もしい人材が集まり、社長も社員も一丸となって困難に立ち向かうことができたのです。

・つづく・

■次回の掲載は五月二十三日(土)を予定しております。